



「グミ・チョココレート・パイン」という  
オタクなサブカル文化の金字塔

物騒な話だが銃乱射事件というものが後を断たず、人々は犯人像や謎めいた動機について首を傾げる。そうした犯罪心理について「ああいう銃乱射事件というのは本人にとつてはお祭りというかハレの日、結局は表現なんじゃないかと。僕は、筋肉少女帯とか表現がいろいろあったから踏みとどまれたと思うんですよ」と大槻ケンヂは言う。銃乱射は悶々とした青春の日々の蹉跌が招いた惨事ではなにか、という話題の流れだった。

イア、あるいはアイドルフリーク的なマシンガントーク：実に多彩な面を持っているが、我々の目の前にいる大槻ケンヂはそのどれでもなかった。妙な言い方をすると「グミ・チョココレート・パイン」という映画の原作者、あるいは素のままの大槻ケンヂがそこに居た。ずっと彼をマークしているオーケン・ファンは知っていたのかも知れないけどそんな感じ。読者に対して、世界に対して、あるいは自分に対して確認を取るように、一つひとつの質問に対して丁寧に言葉を選ぶ。その言葉は取材会場となった古風なビルの一室にいた我々をいろんな世界へと連れていってくれる。

いる方が大切だと歌わせ、今なお読まれ続ける不朽の名作。それはクラスの中で何の取り柄もなく、ありあまる性欲と「自分は他の奴らとは違って特別だ」という根拠のない自信を携えて悶々とした日々を過ごしている賢三という少年をめぐる、まさに青春物語。コンプレックスの渦と行き場のないエネルギーとホルモンが混在しながらも、どこまでもプラトニックで美しい物語だ。男女を問わず、多くの若者がこの道を通った。彼は93年から10年あまりをかけて「グミ編」「チョコ編」「パイン編」の三部作を書き上げた。

「ジー・バップ・ハイスルール」や「パツチギ」とか、元気が良くて威勢が良いヤンキーの青春だった。『スウィング・ガールズ』のように仲間とひとつになって何かを成し遂げるブチ成功者であるとか、こと邦楽界においてそうした映画はあるんです。しかし、現実はそのような勝ち組の若者なんて少数派。「何も成し遂げられなかった若者ってたくさんいるし、喧嘩もできない、かといってメジャーなものに共感もできないサブカルでオタク的なものに興味があった、悶々としたまま青春が終わってしまった」という、『グミ・チョココレート・パイン』はそんな少女たちをすくい上げて、スクリーンにかけた映画だと。それは素晴らしいことだと思えました。

何もなし得なかった少年少女をすくい上げた、  
「グミ・チョココレート・パイン」という小説と映画。

## 大槻ケンヂ

おおつき・けんじ

だれも銀幕に映さなかったサブカルな、オタクの少年少女をスクリーンに

「僕にとつての代表作ですね。『グミ編』『チョコ編』なんて小説の書き方も把握できてない状態で書いて、伏線が途中で消えてたりとか、このハナシはどこへいったんだ？ ってことがたくさんあって、今読むと恥ずかしいんですけど、それから6年くらいのブランクがあつて『パイン編』はきちんと書くこと思つて仕上げました」。完結して日が経つてもなお支持を得ていて、ヴィレτζジバンガードあたりでは専用コーナーがあり、未だに売れ続けている。「自分が書いたものではあるけど、今も昔もいるであろう、サブカルなオタク少年や少女の希望みたいなものになつているかと思うと感無量です」。そんな「グミ・チョココレート・パイン」が映画化された。かつて、ダメな若者を励まそうとするとき、邦画界はヤンキー的だったりギラギラとした自我をもつ存在をスクリーンに映した。



そんな大槻ケンヂの話聞いて、京都で青春時代を過ごした読者はどんな情景を思い返すだろうか。「マハラジャ祇園」が終わって木屋町にオープンしたイマジニアムビル、その地下にあって夜明けまで別嬪が集まる「クラブガイア」に雪崩込み、幾分落ち着いた手合いは祇園の「NEXUS」へ…。と聞かされてピンと来ない読者はきつとグミチョコ組だろう。映画「グミ・チョココレート・パイン」の主人公になった、'80年代にサブカル文化を生きたオタク少年に通じる心境を抱え、メディアシヨップでアートブックを物色し、洛北の名画座京一会館に通ったのではないだろうか？きつと、グミチョコ的な少年少女がサブカル的な煩悶を抱えて、賑やかな京都の街の水面下を漂うのだろう。'80年代も、そして今も。

## 怒濤の京都ツアー体験とコブラツイストの謎掛け!?

彼がライブで初めて京都に来たのは20歳の頃、当時の東京のインディーズバンドを紹介するイベントに参加した時だったという。「夜の12時に原宿駅前に集合して、バスに乗って行ったんですね。ライブ会場が木屋町にある京都ビッグバン(現G×E×T)で、オカシかったのが宿泊先が何故か嵐山の旅館!出演者が多くて機材車もなかったので阪急電車に乗って。オカシイでしょ?20歳くらいの時のツアーで初めての京都だったので、わけわかんなかったですよ。不思議な京都ツアーの後は、筋肉少女帯でデビュー後の同じく京都ビッグバンへの出演。「その時も聞かされ



大槻ケンヂ (おおつき・けんじ)

東京都生まれ。ミュージシャン、作家。通称オーケン。中学の頃に'80年代ニューウェーブ、JAGATARAやザ・スターリンなどのロックバンドに影響を受け音楽に没頭。'82年、中学の同級生内田と共にロックバンド「筋肉少女帯」を結成、'93年ナゴムレコードからインディーズデビュー。ロック、サブカル層を中心に人気を博す。音楽活動以外には小説家、エッセイストとしても活動。'94年発表の短編集「ぐるぐる使い」で、表題作が第25回星雲賞の本短編部門を受賞。現在は「筋肉少女帯」や「大槻ケンヂズ」などで積極的にライブを行う。

ていないのにオープニングアクトがあって、それもびっくりにしたなあ。面白いバンドだったけど(笑)という記憶。不可解なイメージを京都に持ったかもしれない大槻ケンヂだったが、当時はローザ・ルクセンブルグをはじめ京都出身のアーティストも東京に進出していて、彼らと接する機会があった。特にどんと(元ローザ・ルクセンブルグ・'00年没)には強烈なインパクトがあったという。こうして京都のアンダーグラウンド・シーンのイメージは広がった。「確かポリスが京都に来たとき、ナントカ講堂ってところに来た気がするんだけど」。西部講堂?そう、西部講堂が関西のロックシーンのメッカというイメージがありました。大阪とは全く違って、なんかこうサイケデリックやヒッピーカルチャーとか、シーンが根付いている印象で。どんとさん達って京都弁で、ヒッピーな感じが丸出しの人じゃないですか。村八分とかも京都、スゴイところなんだろうなと思いました。で、5、6年前に京都を散策したんだけど、その時に何故か京都で新日本プロレスを観ましたね(笑)。西村修っていうレスラーが出て、コブラツイストで勝ったのを今も覚えている。「いま(とき)、コブラツイスト?」っていう衝撃が(笑)。その時にしても本当に昔の技で。

『やっぱり京都だけに、伝統あるトラディショナルな技を使ったのかなあ』とか思っていました(笑)。これは、一種の謎掛けかなあ(笑)』

## 「オレは他のヤツらとは違う」根拠のない自信と狂気が生むもの

映画「グミ・チョココレート・パイン」の設定のように、現代と過去が入り組み、街の細部や人の心の細かい所まで探検しているような大槻ケンヂの言葉。そうした想像力が、グミチョコの世界のような悶々とした自身の青春時代を醸造したのだろうか。「確かに、映画のように若い頃から『何かを吸収するんだ』



という気持ちはありましたよ。他のヤツらが聖子ちゃんを聴いている時にオレは『タクシー・ドライブ』をみてキューブリックを見て!みたいな。でも、それで変な方向へ行くと、あのコロナバイン高校の銃乱射事件みたいなものに繋がっちゃうような気がします。僕なんかもそういう気持ちがあつて『学校の連中は全然わかってくれない』みたいなことを思ってた。それで友達と、友達のお父さんの部屋でバカな音楽を作ってたわけです。

では、萌えが流行している様でオタクなサブカル魂がトーンダウンしているように見えるのはなぜだろう?「それはきつと、パソコンが悪いんだと思います。プチ・カリスマになれちゃうから。ミクシーがいけない。僕はやり方もわからないけど(笑)。解放せずに煩悶せよ。弾けず、輝かず、生きる青春時代にも未来はある。

そんな映画と小説の「グミ・チョココレート・パイン」そして大槻ケンヂの生き方は、美しき負のオーラを携えて我々に語りかけてくるのである。

## 「グミ・チョココレート・パイン」

原作/大槻ケンヂ 監督/ケラリーノ・サンドロヴィッチ  
出演/石田卓也 黒川芽以 大森南朋ほか

上映スケジュール  
■2月16日~  
京都みなみ会館  
■公開中  
テアトル梅田  
HTTP://GUMICHOCO.COM/

© 2007 「グミ・チョココレート・パイン」製作委員会